

学位論文の要旨

所 属	三重大学大学院医学系研究科 甲 生命医科学専攻 環境社会医学講座 健康増進・予防医療	氏 名	國 分 真佐代
主論文の題名 Postnatal depression, maternal bonding failure, and negative attitudes towards pregnancy: A longitudinal study of pregnant women in Japan			
主論文の要旨 【目的】 産褥期のうつ病は出現頻度も高く、母子関係や子供の認知・情動発達に影響を及ぼす。一方、出産後の女性は赤ん坊に拒絶や憎悪といった感情を抱く場合がある。これは愛着不全と呼称され、今日周産期のメンタルヘルスを考える上で産後うつ病と共に重要な課題の一つになっている。しかし、これまでの先行研究において産後うつ病と愛着不全の因果関係を明らかにした調査はほとんどない。また、両者に関連する危険因子を妊娠早期から同定できれば、産後うつ病や愛着不全に対する早期ケアおよび予防的介入も可能になる。 そこで、本研究では日本人妊婦を対象とした縦断的調査において、産後の抑うつと愛着不全の関係性および個々の危険因子との関連について検討した。 【方法】 2004年4月～2005年12月の間に津市内にある4つの産科医療機関を受診した健康妊婦107名を対象として、妊娠末期、産後5日後、産後1ヵ月後の3時期に各種の評価尺度を用いて縦断的調査を実施した。 使用した評価尺度は、1) 妊娠末期の不安と抑うつ尺度(HADS)、2) マタニティー・ブルーズ質問票(MBQ)、3) エジンバラ産後うつ病自己質問票(EPDS)、4) ボンディング質問票(MIBQ)、5) 妊婦と配偶者の妊娠への否定的態度(オリジナル尺度)を用いた。 統計学的解析方法として 各変数間の平均値を計算して変数間の相関を調べた。そして変数間の一時的な関係を明確にするためにパスモデルを作成して、共分散構造分析(SPSS:ver.19.0、AMOS:ver.19.0)を用いて検証した。ここでは、5つの仮説モデルを作成して適合度指標を用いて検証した。			

【結果】

1) 変数間の相関

①女性と配偶者の「妊娠への否定的態度」は、「望まない妊娠」および妊娠末期のHADS「抑うつ」値と有意な相関を示した。また女性の「妊娠への否定的態度」は、産後5日後および産後1ヵ月後のMIBQ値と相関を示した。

②妊娠末期のHADS「不安」と「抑うつ」の値は、相互に有意な相関を示し、また産後5日後と産後1ヵ月後の「抑うつ」と「愛着不全」とも有意な相関を示した。しかし、妊娠末期の「不安」と産後5日後の「愛着不全」の間ならびに妊娠末期の「抑うつ」と産後5日後の「抑うつ」の間には相関を示さなかった。

③MBQとEPDSによる「抑うつ」と「愛着不全」の関係性については、産後の産後5日後と産後1ヵ月後の各時期において有意な相関を示した。さらに産後5日後の「愛着不全」は産後1ヵ月後の「抑うつ」と有意な相関を示した。「年齢」および「出産回数」と他の変数との間に相関はなかった。

2) パスモデル

作成したパスモデルは、モデルの適合度を示す指標は高かった。仮説モデルから、以下の最終モデルが確認された。1)「妊娠への否定的態度」は産後5日後の「愛着不全」を予測した。2) 妊娠末期の不安は「マタニティー・ブルーズ」と産後1ヵ月後の「抑うつ」と「愛着不全」を予測した。3) 産後5日後の「愛着不全」は産後1ヵ月後の「愛着不全」を予測した。4) 誤差変数を介して、産後5日後と産後1ヵ月後の「抑うつ」と「愛着不全」に有意な関連があることを見出した。なお、仮説モデルでは産後5日後の「愛着不全」が産後1ヵ月後の「抑うつ」を予測すると仮定したが、パス係数は低く統計学的に有意差はなかった。

【考察】

本研究では妊娠末期の不安が産褥期の抑うつと愛着不全を予測した。従来の調査では、妊娠期の不安と産後うつ病の関連は指摘されていたが、妊娠期の抑うつと不安を個別に区別して測定した縦断的な報告はほとんどない。したがって、妊娠期の不安は、産褥期のうつ病と愛着不全に直接関連するため、有意義な所見であると思われた。

産後うつ病に対する妊娠への否定的態度の効果は、愛着不全を介在している可能性が高いことが示唆された。つまり、産後うつ病と愛着不全は、異なるいくつかの危険因子と相関関係を示して、産褥期の経過の中で独立して動いていることが示唆された。

以上から、妊娠への否定的態度、妊娠末期の不安、さらに愛着不全に対する治療的および予防的介入が円滑に実施されれば、産後うつ病の発現を減少させることができると考えられた。